

(中間評価)

世界で活躍できる研究者戦略育成事業 (実施期間：令和元年度～令和10年度)

プログラム名：地方協奏による世界トップクラスの研究者育成

代表機関：広島大学（総括責任者：越智 光夫）

共同実施機関：山口大学、徳島大学、愛媛大学

取組の概要

中国四国地方にある大学が総力を挙げて、世界でトップクラスの研究者を育成する仕組みを構築する。具体的には、国際的なプレゼンスと影響力のある研究者の育成を実現するために3I（Innovative, Influential, Impactful）研究者像を設定し、これに到達するための若手研究者の育成プログラムの開発を行う。メンタリング・研修・交流等を国際共同研究の実践と効果的に組み合わせる事で、若手研究者の能力開発を着実に進める。同時に、目的に適した評価指標の開発を通じて、プログラムの効果を測定し実証する。

本取組により若手研究者の国際的なビジビリティ向上とキャリアの「好循環」を実現するのみならず、それぞれの所属機関の価値と中国四国地方にある大学のプレゼンスを向上させる。そして実証を通じて、我が国の研究開発力や国際プレゼンスを高めるモデルケースとして普及展開し、日本全体を牽引する。

(1) 評価結果

総合評価	進捗状況 (全般)	進捗状況 (事業運営 体制の構築)	進捗状況 (研究者育成 プログラムの開発、 実証、普及・拡大)	進捗状況 (研究者育成 体制の構築)	進捗状況 (支援対象 研究者のサポート)	今後の進め 方と取組の 継続性・発展性
S	s	s	s	s	a	a

総合評価： S（卓越した水準にある）

(2) 評価コメント

広島大学の強力なリーダーシップを核として、共同実施機関である山口大学、徳島大学、愛媛大学がそれぞれの大学独自の取組を行いながらうまく連携したプログラムであり、地方の拠点大学を中心とした大学の連携モデルとしても優れている。プログラム要素の開発は順調な展開を見せ、特に Individual Development Plan (IDP) と Achievement Card (AC)の開発についてはフェロー対象に効果的な運用が進んでおり、他大学への普及展開が大いに期待される。フェローの育成に関しては、世界で活躍する研究者のイメージをより明確にすることが望ましく、フェローが真に世界に通用する研究者へと成長するメカニズムを分析してプログラムの質を更に高め、URA等による持続可能な支援体制も整備することが期待される。研究分野のダイバーシティの点においては代表機関、共同実施機関ともに人文社会系のフェローが少なく、今後は分野のバランスを考慮しつつ総合大学としてフェローを育成する制度設計を図ることが求められる。

・進捗状況（全般）：広島大学と共同実施機関との密な連携のもと事業が進められ、海外アドバイザリーボードの設置等による運営体制の工夫や、個々の育成プログラム要素の開発についても工夫が見られ、他大学へ普及展開できるものと期待できる。フェローの応募資格についてはより分野が広がるような工夫が必要である。

・進捗状況（事業運営体制の構築）：運営責任者ならびにPMがイニシアティブを発揮し、代表機関と共同実施機関の連携や海外アドバイザリーボードも良く機能している。今後は、URA等の研究支援人材をうまく取り入れた持続可能な体制構築を検討していただきたい。

・進捗状況（研究者育成プログラムの開発、実証、普及・拡大）：IDPやACの実践と開発は評価に値する。汎用性のあるプログラム要素として他大学も活用できるようノウハウの蓄積と共有が今後期待される。また、大学や分野の垣根を越えてフェローが交流できるリトリートはフェローが相互研鑽できる理想的な場であり、開催頻度を増やすことが望まれる。真に世界で活躍できる研究者になってきているのかを、どのように観測するのかを明確にし、プログラム内容の更なる改善を重ねていただきたい。

・進捗状況（研究者育成体制の構築）：フェローの応募資格を採用後2年程度のテニュアトラック教員とすることで、各機関とも本プログラムをうまく活用している。分野の制限は設けていないが人文社会系のフェローが少ないことについては今後改善が必要である。

・進捗状況（支援対象研究者のサポート）：海外アドバイザリーボードやIDP・AC、フェロー同士のピアメンタリングなど様々なレベルの育成サポートが用意されており、フェローは心強いものと推察する。一方で、サポート体制として、URAはじめ組織としてどのような体制を構築すべきか大学間の協力も含めて検討の余地がある。また、財源の事情などを踏まえた大学による支援対象者の違いと本プログラムの制度がどのように整合しているのか、普及展開の観点から知見を整理していただきたい。

・今後の進め方と取組の継続性・発展性：地方の大学群を中核大学がある程度まとめながら体制を構築するケースとして注目している。今後、中国四国地方の他大学への普及展開を図るために、共同実施機関と中核大学の役割分担や資源（支援人材や研究環境）の共有などについての意見や要望をまとめ、問題点を整理してほしい。研究者育成体制の持続可能性については、URAはじめ、組織としてどのような体制をとるべきかが重要であるので、この点についても知見をまとめてほしい。事業前半においては、コロナ禍により海外派遣や国際交流が困難となったことを踏まえ、事業後半では、フェローが実際に世界に出ていく場面をどのように強化するのか具体的な計画が望まれ、参加したフェローの成長の軌跡も追跡して分析していただきたい。